

# 四郷下古屋の棒の手とその分類

## BOUNOTE in Sigou Sitagoya and classification of it

1K04B188-3

深澤 歩美

指導教員

主査 寒川恒夫先生

副査 石井昌幸先生

### 序章

愛知県には「棒の手」と呼ばれる郷土芸能がある。棒の手は、現在、豊田市内の各所で盛んに行われており、中でも四郷地区は継承者が多い。四郷祭りは、県内で最も盛んに行われている棒の手の祭りである。本研究は、2007年10月13日、14日の両日に行われた四郷祭りのフィールドワークを基に行うものである。目的は、四郷下古屋の棒の手の実態を明らかにすること、そしてもう一つは、棒の手が、踊り、或いは武術のどちらに類するものであるのかを明らかにすることである。きっかけは、棒の手を踊りの範疇に含める文言があり、それに違和感を覚えたことによる。棒の手の勇壮な演技からは、踊りという言葉は似つかわしくなく、武術的性格が多分にあると感じたため、これについて考察するに至った。

### 第一章

調査地区の概要 四郷祭りの舞台である、豊田市と四郷町下古屋の概要を述べる。

### 第二章

棒の手について 棒の手は、6尺(約1.8メートル)前後の棒や木刀、太刀、長刀、槍、鎌、鎖鎌、十手、傘などの武具を使う芸能で、古くから祭礼の場で奉納演技として献じられてきた。棒や木刀を使うものを表型、太刀、長刀、槍、鎌などの武具を使うものを裏型(キレモノ)と言う。棒の手と深く関係しているものに、「馬の塔」がある。馬の塔は、かつて尾張、西三河で行われた代表的祭礼習俗のひとつで、豪華な馬具で飾った馬を社寺へ奉納するものである。その代表格が猿投神社である。かつて猿投祭りには、飾馬と棒の手を奉納するために、180余の村々から参詣者が集結した。猿投祭りの形式は、四郷祭りとほとんど同じであるため、猿投祭りについても述べる。棒の手の由来や発生については、明確にはなっておらず、様々な説が唱えられている。棒の手には、多くの流派があり、多くの村民がそこで棒の手を習得し、後世に伝えていった。現在、豊田市内に伝わる流派は、鎌田流、見当流、起倒流、藤牧検藤流である。現在、

市内に23の保存会が設立され、それぞれの団体が伝統継承に力を注いでいる。

### 第三章

四郷下古屋の棒の手 四郷下古屋の棒の手について述べる。四郷地区には、市内につたわる4流派のうち、鎌田流、起倒流、藤牧検藤流の3つが伝承されている。下古屋には藤牧検藤流が伝わる。下古屋に棒の手が伝わったのは、明治42年(1909)のこととされる。以後脈々と受け継がれ、現在に至り、目録保持者は48名にのぼる。四郷祭りは、2007年10月13日に前夜祭が、翌14日に例大祭が開催された。祝詞、巫女の舞などの神事に始まり、馬の塔の行列行進、棒の手の演技奉納まで、盛大に執り行われた。詳細は本文にて。下古屋には12の演目が伝承されている。それぞれの流派に伝えられる型は、固く守られ、後世に伝えられていくものである。四郷祭りは県内最大規模を誇るが、それでも棒の手の知名度は低い。伝統を後世に伝えていくことの難しさとその重要性を感じながら、ますますの盛栄を願う。

### 第四章

棒の手の分類 この章では、棒の手が踊りであるのか、武術であるのかいくつかの視点から考察していく。武技の踊りとして、「南の島」、「太刀踊」、「鬼剣舞」を取り上げて比較したが、踊りであることを否定するまでには至らない。しかし、差異点が多く見つかった。武術では、巻物、免許皆伝、礼儀、掛け声、型の名称、訓練を取り上げて比較した。すると、合致する点が多くみつけた。しかし、差異点もあるので、武術であるとは断定できない。結論は、棒の手を踊りの範疇に入れることは、間違いではないが、踊りよりも武術の性格に近く、武術そのものと言える程である。従って、「武術の芸能」という結論が妥当だと思う。しかし、芸能化した影響が最も表れているのが、型であると思う。この部分を比較しなければ、本当の答えは導き出せないように思う。

以上が私の研究結果である。